エピグラフ（引用文）のコミュニケーション・ツールとしての機能性に関する研究(2)

―現代のジャンル小説におけるエピグラフ実践に関する研究―

那　珂　　元

著者は、エピグラフの実に見事な役割を解任することによって、それと袂を分かつ。つまり、エピグラフは、もはや、著者の肌にはりついていたものではなくなり、浮遊をはじめ、場違いで不作法な様相を帯びたものになっていく。しかし、このような小さな戯れのすべては、その根本的な機能、すなわち、刺青の機能をひたすら強化していくだろう。

――アントワーヌ･コンパニョン　『第二の手、または引用の作業』（Compagnon, 2010, p.442）

はじめに

エピグラフとは「通常は作品ないし作品の一部の冒頭に銘句 exergue として置かれた引用（符）」（Genette, 2001, p.169）のことを指し、一般的には、テクストで構成される叙述形式の著作のなかで著者（ときには編集者）が実践する“引用”行為の一つであると解される。ジュネットは 17 世紀から 19 世紀のイギリスやフランスの小説や思想的作品におけるエピグラフの実践について分析し、エピグラフの機能性を、1）タイトルを解明し説明する、2）テクストを注釈する、3）エピグラフを取り上げた作品の著者（エピグラフ実行者）のエピグラフの作者（エピグラフ原作者）に対する尊敬の念や深い敬意の表明、４）作者自身の作品が文化的・歴史的かつ知的な作品に帰属しているというシグナルを読者に伝える、の４つに集約した（Genette, 2001, pp.183-187）。ジェラール・ジュネットによれば、エピグラフが 17 世紀以降のイギリスやフランスにおいて、最初は思想作品のなかで、その後はその時期に新しく成立した叙述形式である小説 novel のなかで広く用いられることになったという歴史的な経緯を持つため、エピグラフは引用行為のなかでも「後発の実践」（Genette, 2001, p.172）であるとした。この後発の実践は、しかし、現代の大衆文化を背景に日々生産され、また消費されているジャ

ンル小説のなかにおいてもごく一般的行われている。

本稿の関心は、現代のポピュラーカルチャーのなかで多様化しているエピグラフの機能性が何か、それは、当初、エピグラフの使用範囲が文字メディアに限られ、また読者の価値観や生き方が今日よりもずっと限られていた時期のエピグラフの機能性―本稿では当初のエピグラフの機能性をジェラール・ジュネットが17世紀～19世紀の書物で用いられたエピグラフの分析から見出したエピグラフの機能性を援用する―と比べ、どのように異なるのか（もしくは共通する機能は何か)、またそれはなぜか、についての一考察を加えることである。

問題の所在と本稿の目的

今日のジャンル小説におけるエピグラフの機能性について考察を始める前に、まずもってジェラール・ジュネットが『スイユ』のなかで分析したエピグラフの機能性の説明から“見落とされているもの”について指摘しなければならない。結論を先に述べてしまうと、“見落とされているもの”とは、読者の社会的文脈に寄り添おうとする著者の精緻な姿勢である。それは、より端的に言うと、著者がエピグラフを介してどのように読者との間に「同時代性」を共有する関係性を構築していくのかという緻密な戦略上の姿勢のことである。そして、現代の大衆文化におけるジャンル小説のなかで用いられているエピグラフの特徴や機能性やその効果を理解するためには、著者が読者との間に「同時代性」を共有する関係性を構築しようと試みる緻密な戦略性としてのエピグラフの機能の説明の欠如は致命的な問題なのである。そこで本稿では、現代のジャンル小説のなかで用いられているエピグラフの事例を2，3挙げ、著者がエピグラフを介して、どのような戦略を立てて、読者との間に「同時代性」を共有する関係を構築しようとしているのかを確認することをとおして、今日のポピュラーカルチャーにおけるジャンル小説のなかで実践されているエピグラフの機能性の特徴についての一考察を試みたい。

ジュネットによるエピグラフ実践の分析の問題点

ジュネットがエピグラフ実践の効果が曖昧である理由は、エピグラフの分析収

集および分析方法の二つの分析上の問題によるものだと考えられる。この問題については、ジュネット本人がエピグラフの機能性の説明の冒頭で告白しているとおり、エピグラフの機能性の効果はかなり曖昧なもので、「明示的なものではない」（Genette, 2001, p.183）。ジュネットは『スイユ』のなかで、そう考える理由について、「（エピグラフの機能の）不十分な調査」（Genette, 2001, p.183）であったこと、それに加えて、「（作者が）エピグラフを付けるというのは、常に、その解釈があくまでも読者に委ねられている沈黙の振る舞いであるから」（Genette, 2001, p.183）という二つの釈明を述べている。まず前者の分析収集対象の不十分性については容易に説明できる。つまり、そもそもジュネットがエピグラフの機能性を論じるにあたり分析した著作は、意図的か偶発的かはともかくも、専ら17 世紀以降から 19 世紀までの時期に出版されたイギリスやフランスにおけるジャンル小説であり、20 世紀以降のポピュラーカルチャーのなかで大量消費されるジャンル小説は分析対象にはなっていなかった。

一方で、後者のエピグラフの分析方法の問題、すなわち、曖昧なエピグラフの解釈の分析を、読者側の「沈黙の振る舞い」に帰する問題の方は、もう少し丁寧に見ていく必要がある。仮にジュネットの指摘通りにエピグラフの解釈が完全に、かつ沈黙のうちに、読者に委ねられてしまうとしても（物理的に作品は、著者の手を完全に離れてからしか読者の手に届かない。その意味において、ジュネットの指摘は、論理的に間違ってはいない。）、そのことが、作品の著者本人が、読者の“自分勝手な”エピグラフの解釈や、多様な＜読み＞を十分に考慮していない、という説明にはならないはずだ。むしろ実際にはその逆で、多くの著者は、自分が引用するエピグラフを、読者がどのように解釈し、またどのように＜読み＞進めていくのか、そして、どのようにそれら気ままで多様なエピグラフ解釈を本テクストの解釈へと結びつけていくのか、について十分に配慮し、緻密に、また用意周到に引用するべきエピグラフを選ぶことを好むのではないだろうか。読者について、あるいは、読者のテクストの読み進め方に全く思いを巡らせない著者が、どうして読者に自分の書き記した物語を飽きさせずに最後まで読ませることができるのだろうか、と私は単純に考えてしまう。そのことは、今日のポピュラーカルチャーにおけるジャンル小説の「売り手」である著者にとって（もちろん出版者も同様に）とりわけ頭を悩ませる創造上の日々の課題であろう、と容易に推察できる。そのような前提に立つと、ジュネットのエピグラフの機能性の説明には、その読者による暗黙理のエピグラフの解釈なり＜読み＞に対する著者の配慮、ま

たは「向き合う姿勢」についての説明が欠如している、あるいは“見落とされている”と問題を指摘することは十分に可能である。もう少しはっきり言うと、私は、ジュネットのエピグラフの機能性の分析の問題は、読者に委ねられたエピグラフの解釈について、それは読者の「沈黙の振る舞い」だからよく分からない、と即座に片づけてしまうことによって、エピグラフに記された記述内容が読者の本テクストの解釈や理解への主体的な関与に、どの程度の効果を及ぼしているのか、という分析が完全に抜け落ちてしまっていることである、と考えている。

ポピュラーカルチャーにおけるジャンル小説

ここでひとまず、ジュネットのエピグラフの機能性の分析の問題のなかから見落とされた、読者の「沈黙の振る舞い」としてのエピグラフ解釈や＜読み＞に対する著者の「向き合う姿勢」の考察は一時的に棚上げし、しばし、今日のポピュラーカルチャーにおけるジャンル小説について考えてみたい。というのも、今日のポピュラーカルチャーにおけるジャンル小説とは何か、ということについて考えることは、とどのつまり、書物のエピグラフが「（著者の読者に対する）最初の言葉であり、これから本格的に話を始める前の咳払い」（Compagnon, 2010, p.441）であることを真剣に認めた場合には、今日の文芸カルチャーのなかで、ますます「売り手」としての著者に求められる、煩わしいが、しかし深刻な課題、つまり、「いかに読者に書物の魅力を伝え、飽きさせずに最後まで読ませるのか」という課題に向き合わなければならぬことに帰結する、と思うからである。

そもそもポピュラーカルチャーのなかで大量消費されるジャンル小説とは、一体どのような小説を指すのだろうか。John Storey（2009）は、“ポピュラーカルチャー”という用語を、以下の４つの定義で説明している。すなわち、ポピュラーカルチャーとは、（１）「多くの人が好む文化」、（２）「下級の、質の低い作品」、（３）「マスカルチャー、人に大量に消費されるモノ」、（４）「人の人による人のための文化」、そして（５）「下位クラスへの抵抗の勢いと多数派集団への編入の勢いとの拮抗の文化」の４つに定義される。このうち（２）で示されている上流の質の高い文化やメディアの対立項としての「低俗なテイストを持つ、下位クラス向けの質の低い文化」の賛否、および（５）下位クラスと多数派クラスとの拮抗状態としての文化については、それらが本稿の関心事の範囲外であることから、本稿

では特段の議論は避けるが、それにしても Storey のポピュラーカルチャーの４つの定義のうち、（１）および（３）については容易に理解できる。つまり、ポピュラーカルチャーとは、生産者ではなく消費者に、少数の特定の人ではなく多数の不特定の人の嗜好に合わせた、もっと言うと、消費者のニーズの“最大公約数”に偏向した、いわば“コンテンツの消費者指向”の非常に強い文化である、と容易に解釈することができる。ジャンル小説についてもこの解釈が当てはまる。。つまり、なるべく多くの読者のニーズを満たし、それゆえ、なるべく多くの読者が好むような、いわば“読者指向”の小説であればあるほど、その小説の売れ行き（もちろん作品の良し悪しは、作品の売れ行きに比例するとは限らないことは言うまでもない。売れない名著は世の中に数多く存在する。逆に、爆発的に売れている作品すべてが批評家や書評家によって良書であると評価されるわけでもない。）が良くなる。ポピュラーカルチャーにおける小説も、大量生産と大量消費の経済サイクルのメカニズムのなかに確実に取り入れられているはずだ。

“folk culture”としてのポピュラーカルチャー

その一方で、ポピュラーカルチャーの定義（４）、つまり、「人の人による人のための文化」とは、どういうことだろうか。Storey によれば、（４）の定義におけるポピュラーカルチャーとは、“人”にその起源を持つ文化で、“人びと”にかかわる、“嘘偽りのない（authentic）”文化のみを指す用語である。その意味において、このようなポピュラーカルチャーは、「同一社会集団の中で、共通の生活・思考・行動様式をもつ人々の文化」（Storey は“folk culture”という用語を用いている。）なのである。またそれは、資本家中心の現在の資本主義におけるシンボリックな異議申し立て（protest）の主たる源泉として形成された労働者階級に属する人たちの文化（working-class culture）の考え方を殊更に美化した状態としばしば同一視される文化でもある。ただし、この定義におけるポピュラーカルチャーは、資本主義による大量消費文化としてのマスカルチャーと対抗しているものとして位置づけられている点には留意する必要がある（日本語ではこの両者はしばしば「大衆文化」と同一の語に訳される）。もちろん、この定義を採用する場合の問題点は幾つかある。この問題点について Storey は、それでは誰を同一社会集団としての“人びと”のカテゴリーに含めるのかという評価の問題があること、また、資本主義における大量消費社会への異議申し立てを文化的なア

イデンティティに据える“人びと”集団の文化（folk culture）としてのポピュラーカルチャーの領域内で使用されている材料 (materials) それ自体が、そもそもマスカルチャーの恩恵を受けているという矛盾を内に抱えていること、などを挙げている。とりわけ後者の問題、すなわち、“人びと”集団の文化としてのポピュラーカルチャーのなかに内在している大量消費文化としてのマスカルチャー（マスカルチャーに内包されるポピュラーカルチャーの場合も同様）の自己矛盾を抱えた文化の在り方については、今後さらなる議論が求められるだろうし、Storey もポピュラーカルチャーの定義とは別の章で議論を展開している。

本稿では、ポピュラーカルチャーを“folk culture”と捉える際の定義上の問題点について議論は深めない。それよりもむしろ、“folk culture”の特性である“人びと”集団の文化、すなわち「同一社会集団の中で、共通の生活・思考・行動様式をもつ人々の文化」という Storey の定義を踏まえたうえで、一旦棚上げしたジュネットのエピグラフの機能性から“見落とされている”問題に考察を戻しながら、今日のポピュラーカルチャーにおけるジャンル小説に求められるはずの課題、つまり、エピグラフを介して、どのように読者に書物の魅力を伝え、飽きさせずに最後まで読ませるのか、というジャンル小説の著者の多くが否応なく直面するであろう課題について議論を展開してみたいと思う。

ジュネットによるエピグラフ分析における、読者の“コンテクスト”の欠如の問題

ジュネットは、エピグラフを“パラテクスト”の一つとして位置づけている。ジュネットによれば、書物には、その内部にあって、いわば「敷居」（ある部屋の内部と外部を繋ぐいわば境界＜パラ＞領域的な場所）と同様の役割を担っている場所が存在している。そして、書物の著者は、この場所を、「（本）テクストのより正しい受容とより妥当な読み」を読者へ伝達することが特権的に許された「ある種の語用論および戦略上の特権的な場」（Genette, 2001, p.12）として活用する（那珂，2020）。つまり“パラテクスト”とは、「敷居の上に横たわって読者がテクストを受容するのを左右したり制御する助けになるような諸要素」（Allen, 2002, p.125）の総体を指す、語用論的および戦略上の要素であると捉えることができよう（那珂，2020）。しかし、書物の外部にある領域と内部としての本テクストとの間をつなぐ、ちょうど境目の敷居 threshold の上に位置しているパラテクス

トの特性は、「それが閾の要素であるがゆえ、曖昧」である。つまり、「パラテクストは、テクストとコンテクストとの間に位置しているし、また“作品（Work）”に所属している要素ではあるが、テクストには帰属してはいない。（言い換えれば、[パラテクストは] 可能世界（possible world）として示された状態」（Wolf, 2006, p.20）なのである。ここでいう「可能世界」とは、「その世界のなかで成立している事態同士が、まったく矛盾していない世界のことである。ようするに、われわれが矛盾なく考えることが「可能」な世界」（日本大百科全書）を指す。そのような「可能世界」としてのパラテクスト性を考慮した上で、あらためて、パラテクストの定義を整理してみると、次のようになろう。すなわちパラテクストとは、表面的、物理的、かつ存在論的（オントロジカル）なテクストなのであり、それゆえ、私たちの現実の物理的な世界が反映された“シニフィアン”としてのコンテンツ（内容）である。しかし同時にパラテクストは、背景的、概念的、かつ認識論的（エピステモロジック）なコンテクストでもあり、それゆえ、パラテクストは、私たちそれぞれの異なる、多様な意味世界が反映された、いわば“シニフィエ”としてのコンテクスト（文脈）の側面をも併せ持つ、語用論的および戦略上の要素であると整理できる。上記のパラテクストの両義的な定義は、当然のことながら、パラテクストの一つの要素であるエピグラフについても当てはなる。つまり、エピグラフはコンテンツであると同時に、コンテクストでもあるのだ。

読者と戯れるエピグラフ

ここまでエピグラフについて考えてくると、ジュネットのエピグラフの機能性のなかで“見落とされているもの”の輪郭がようやくと、うっすら見えてくる。すなわちそれは、エピグラフの「背景的、概念的、かつ認識論的のコンテクスト」に対する語用論的および戦略的な機能性についての考慮なのであり、また、読者それぞれの固有の「可能世界」／認識／意味世界／“シニフィエ”／コンテクスト（文脈）をとおして、エピグラフに接し、解釈することで、また、読者自身が本テクストを読み進めることで気づき、得られるはずのエピグラフの効果に対する著者の配慮に他ならない。

アントワーヌ・コンパニョンは、著書『第二の手、または引用の作業』のなか

で、エピグラフを介した読者の固有の可能世界、または“シニフィエ”としてのコンテクストについて言及している。コンパニョンによれば、エピグラフは、著者によって書物の縁辺箇所のうち本文よりも前の箇所である「前哨」(Compagnon, 2010, p.441）に置かれ、そして、肌に刻まれた刺青のように「石に、凱旋門の上に、銅像の台座に、永遠に刻まれ」(Compagnon, 2010, p.441）た引用のことで、「(著者の）叫びであり、最初の言葉であり、これから本格的に話を始める前の咳払いであり、プレリュードであり、信仰告白」である（コンパニョン p.441)。しかし、コンパニョンは、著者によって高らかに宣言された「(著者）叫び」「最初の言葉」「話を始める前の咳払い」そして「信仰告白」としてのエピグラフが、それが読者に初めて提示されるやいなや、著者の手を離れ、読者の解釈や＜読み＞に完全に委ねられる、というのだ。コンパニョン曰く、

> 著者は、エピグラフの実に見事な役割を解任することによって、それと袂を分かつ。つまり、エピグラフは、もはや、著者の肌にはりついていたものではなくなり、浮遊をはじめ、場違いで不作法な様相を帯びたものになっていく。しかし、このような小さな戯れのすべては、その根本的な機能、すなわち、刺青の機能をひたすら強化していくだろう。
> ――アントワーヌ・コンパニョン『第二の手、または引用の作業』(Compagnon, 2010, p.442)

上記のコンパニョンのエピグラフの効果についての説明は、本稿におけるこれまでの議論の展開に対し、いったい何を示唆しているのだろうか。それはやはり、例のエピグラフの両義性（“シニフィアン”／“シニフィエ”あるいは、コンテンツ／コンテクスト）としての機能の存在である。後述の議論を先走り言ってしまえば、エピグラフの自己愛かつ対象愛的の機能が浮かび上がってくる。これについてコンパニョンは、幾つか興味深い発言をしている。第一に、エピグラフは、「肌に刻まれた刺青」のように「著者の肌」に永遠に刻まれている、という点である。「刺青」とはエピグラフのメタファーであり、それは、これまでの本稿の議論を踏まえれば、「表面的、物理的、かつ存在論的なテクストであり、それゆえ私たちの現実の物理的な世界が反映された“シニフィアン”としてのコンテンツ」を指していると解することができる。刺青＝エピグラフは、著者によって“永遠に刻まれ[た]”のだから、否応なくそこに歴然と存在しているテクストがエピグラフであるはずだ。(もっとも、著者や編集者が初版を出版してから後になっ

て“刺青除去”の手術を施す場合や、逆に新たに追加の“刺青を肌に刻む”場合も可能性としては十分考えられるが、本稿ではそれについては取り上げない。）第二に、しかし著者の作品の“肌に”刻まれているこの永遠のエピグラフは、読者に初めて提示されるや否や、「著者の肌にはりついていたものではなくなり、浮遊をはじめ、場違いで不作法な様相を帯びたものになっていく」のである。このことについてコンパニョンは、「（書物の読者と書物から浮き上がったエピグラフとの間の）小さな戯れ」と表現する。私は、このコンパニョンが言うところの「小さな戯れ」メタファーが指し示す対象とは、“エピグラフが、著者の手を離れ、読者の解釈や＜読み＞に完全に委ねられる状態、または読者による＜読み＞の過程”と理解したい。そして、この“読者の解釈や＜読み＞に完全に委ねられる状態、または読者による＜読み＞の過程”が、「私たち各人毎に異なる多様な意味世界が反映された“シニフィエ”としてのコンテクスト」と深く結びついていると考えることは可能である。そして第三に、これが本稿を通して私が最も強調したい両義的かつ戦略的なエピグラフ効果だが、エピグラフは、読者と戯れることを通して、「根本的な機能、すなわち、刺青の機能をひたすら強化していく」のである。ここでコンパニョンがいうエピグラフの「根本的な機能」は、ジュネットが先に挙げたエピグラフの機能と同じものではない。むしろ質的に全く異なる次元の機能である。つまり、ジュネットの分析には欠けているが、コンパニョンの説明には含まれるエピグラフの特筆すべき機能性とは、読者の多様な可能世界（または意味世界）の構築の作業、それはつまり、読者の多様な解釈や＜読み＞の作業やその過程（エピグラフとの戯れ）を通して、エピグラフ（刺青）の本来的な機能が、一段と、ひたすらに、強化されていく、という相互作用的で、社会構築主義的な機能に他ならない。このエピグラフの根源的な機能はしかし、ジュネットの分析には含まれていない、もしくは、少なくとも明言されてはいない。

このように見てくると、今日のポピュラーカルチャーにおけるジャンル小説の著者がエピグラフに対して特に求められることとは、自分の作品の読者が、著者自身の分身であるエピグラフとのあいだに「小さな戯れ」の関係性を構築できるような丁寧かつ戦略的な演出をすることなのではないか、と思えてくる。著者と読者との間に実践される小さな戯れが、繊細で、緻密で、策略的で、魅惑的で（ときにはエロチックで）あればあるほど、著者が本来意図したエピグラフの機能（それは、作品のタイトルを読者に伝えることかもしれないし、物語の内容やテーマを読者に予告することかもしれない。あるいは、エピグラフの原作者に対する著

者の純粋な尊敬の念や敬意を明示することかもしれないし、エピグラフを読者に提示することをとおして著者本人や作品それ自体の知的・教養的な質の高さを読者に誇示することかもしれない）は、より効果的に読者に及ぼすことが出来るし、それこそがエピグラフが持つ本質的な効果である、とコンパニョンは言っていると解釈することは十分可能だ。

相互作用的または社会構築主義的なエピグラフ効果の実例

そこで本稿では最後に、今日の大衆小説（ポピュラーフィクション）におけるエピグラフの実践例を取り上げ、相互作用的または社会構築主義的なエピグラフの効果について、簡単に確認したい。エピグラフ実践の実例として取り上げるのは、今日のポピュラーカルチャーのなかでおそらく最も「売れている」小説家の一人であるスティーブン・キング（一般にはホラー恐怖作家だと認識されているが）が 1978 年に著した『スタンド』（原題：The Stand（文春文庫）深町眞理子訳、文藝春秋、2000 年）のなかで使用したエピグラフの実践例である。『スタンド』はキングの作品のなかにおいても、読者による人気が最も高いことで知られている。そのことから、おそらく作品は長期間に渡って最も「売れている」作品であると考えられる。（なお、エピグラフの実際の引用文は、著作権上の関係より本稿には載せない。）

『スタンド』では、三つのエピグラフが冒頭に使用されている。しかしまず読者の興味を引くのは、キングが取り上げた全てのエピグラフが、過去の文学作品から引用されたものではなく、アメリカのロックバンドのヒットソングの歌詞から引用されている点である。最初のエピグラフは、ブルース・スプリングスティーンの「ジャングルランド」jungle land（アルバム『明日なき暴走』1975 に収録）の歌詞の一部（最後のハイライトの箇所）から引用されている。また、エピグラフとして使用した箇所に含まれている「後ずさる stand back」「抗う stand」という語の“stand”が『スタンド』のタイトルとして使用されている。物語の本テクストで使用されている“stand”も同様の意味で使用されている（風間, 2021, p.151）。この“stand”という英単語には、「抵抗する」の他に、「立つ」という意味もある。風間（2021）によれば、物語で繰り広げられる「＜善＞と＜悪＞とのどちらの陣営に“立つ”のかという意味」にもこの語が使用されている（風間,

2021, p.151)。さらに、『スタンド』本編を読み通した後に、この第一のエピグラフ全文を読み返すと、これ自体が本テクストで語られている物語の要約であることが分かるのも、この第一のエピグラフが果たしている役割であると考えられる。初めてこの作品を手に取った読者であれば、このエピグラフは、いわばとても良く練られた映画の“予告編的”な効果でもあり、読者は、本テクストを読み進めながら、エピグラフの内容の意味や背景にあるテーマをいろいろと解釈していくはずだ。纏めると、この第一のエピグラフは、読者が第二、第三のエピグラフ、そして物語に本格的に入る前の冒頭に付されることで、タイトルの意味や本テクストの全体の要約を事前に読者に提示する役割を果たしている。ジュネットのエピグラフ機能に当てはめるならば、１）タイトルを解明し説明する、２）テクストを注釈する、という機能に該当するし、またコンパニョンのエピグラフ機能の説明では、「書物の意味を、時に、書物の間違った意味を自らに与える―それは書物を導き、書物を要約する」(Compagnon, 2010, p.441）ということに該当する。いずれにしても、小説『スタンド』の第一のエピグラフが最初に期待されている効果は、読者を本テクストの内容（コンテンツ）―それはブルース・スプリングスティーンが「ジャングルランド」のなかで歌っている、いわゆる「終焉世界後の世界観」(ポストアポカリプス）が、そのまま反映され、体現化されている物語―に誘導することであることは間違いなさそうだ。

しかし、この第一のエピグラフは別の効果もある。それは、読者がエピグラフを介して、物語全体に覆っている「終焉世界後の世界観」(ポストアポカリプス）―これは、このエピグラフの“予告編的”な効果によって読者が読み取る解釈である―をまず読み取ったあと、今度はその解釈が、現実の世界のなかで読者自身が体験しているアメリカ社会に蔓延する「終焉世界後の世界観」の雰囲気や退廃的なムードに繋がっていく、という効果である。60 年代後半から 70 年代半ばまでのアメリカ社会は、少なくとも二つの大きな歴史的出来事を経験した。一つは 1963 年 11 月 22 日にテキサス州ダラスにおけるジョン・F・ケネディ大統領に暗殺であり、もう一つは、1964 年にアメリカが本格介入を始めたベトナム戦争の泥沼化と敗北である。この二つの歴史的出来事のアメリカ社会とアメリカ国民、そして『スタンド』の読者に与えた精神的にネガティブなインパクトは計り知れないと容易に想像できる。もしそうであったと仮定すれば、小説『スタンド』が初めてアメリカで出版された 1978 年当時アメリカ社会には、まったく癒えることのない退廃的なムードが依然として覆っていた、それゆえ、その退廃的なムー

ドは、当時の『スタンド』の読者が背景として持っていた社会的文脈そのものだった、と素直に考えられるのだ。そしてそれはまさに、エピグラフによって示された物語のテーマや物語全体の覆っている雰囲気と完全に重なったはずである。つまり、この第一のエピグラフは、著者が、著者と読者が共通して持っているはずの社会的文脈＝「退廃的なムードの同時代性」に配慮し、そして読者との間に「退廃的なムードの同時代性」を共有する関係性を構築しようとする、厳に緻密なエピグラフ実践の戦略の結果として捉えることができるのである。

この著者と読者との間に「退廃的なムードの同時代性」を共有する関係性を構築しようとする緻密なエピグラフ実践は、第二のエピグラフでより効果的になる。第二のエピグラフで引用されているのは、ブルー・オイスター・カルトの「(恐れるな) 死神を」(Don't Fear) The Reaper（アルバム『Agents of Fortune』(1976) に収録）の歌詞の一部である。このエピグラフは、第一のエピグラフとは少し趣が異なり、物語全体の要約というよりは、物語の展開を予告している。例えば、エピグラフで登場する死神とは、物語冒頭から、物語の展開の要素として登場する“キャプテン・トリップス”と呼ばれる致死率が99％のインフルエンザ・ウイルスのことだと容易に読み取れる。また、読者は物語を読むにしたがって、物語の展開を劇的に演出する様々な＜悪＞の陣営の登場人物たちをエピグラフのなかの「死神」に重ねるかもしれないし、さらに、物語終盤においては、私たち人間のこころの内深くに常に在る暴力性とエピグラフの「死神」と結びつけるかもしれない。これらのエピグラフの＜読み＞は、ある程度は読者の側に委ねられているし、いま私も“勝手気まま”に第二のエピグラフと物語とをむすびつけた。著者であるキングは、第二のエピグラフのなかで、物語の具体的な＜読み＞を読者に対して“暗に仄めかしている”にすぎず、具体的に指示しているわけではない。その意味では、この第二のエピグラフは、前述したとおり、「小さな戯れ」とコンパニョンが言う、“エピグラフが、著者の手を離れ、読者の解釈や＜読み＞に完全に委ねられる状態、または読者による＜読み＞の過程”を効果として読者に与えていると推察できる。この読者のエピグラフに対する多様な解釈や＜読み＞を可能にするのは、第一のエピグラフと同様、いやそれ以上に、著者のキングが、「退廃的なムードの同時代性」を読者との間に共有する関係性を構築しようとする緻密なエピグラフ実践を行っているからに他ならない。

そして、第三のエピグラフでは、もはやそれが指し示す具体的なコンテンツも

なくなり、前者二つのエピグラフ実践をとおして著者と読者間で段階的に共有化された社会的文脈である「退廃的なムードの同時代性」だけがエピグラフや物語から切り取られて、脱文脈化されていく。エピグラフとして引用された歌詞は、カントリー・ジョー＆ ザ・フィッシュが1969年に「ウッドストック・フェスティバル（Woodstock Music and Art Festival）」のなかで歌ったことで話題になった、「THE FISH CHEER/I FEEL LIKE I'M FIXIN' TO DIE RAG」（アルバム『I Feel Like I'm Fixin' to Die』1967年発売）ベトナム戦争の反戦ソングの歌詞である。実は、この引用の元は、歌の本編というよりは、歌い始める直前の“What’s that spell ？”（あの綴りは何だ？）という三度の歓呼である。カントリー・ジョー＆ ザ・フィッシュは、ウッドストックのライブにおいて、バンド名に含まれるF-I-S-Hの綴り（spell）を観客に言わせるため“What’s that spell ？”（あの綴りは何だ？）と三回歓呼した。ではキングはなぜこの三度の歓呼をエピグラフとして採用したのだろうか？『スタンド』の原書のなかでは三度“WHAT’S THAT SPELL?”の記述が繰り返されているが、深町眞理子訳版では、“SPELL”が「まじない」と訳されている。翻訳者が勝手にキングの引用した“SPELL”の文脈上の意味を「綴り」から「まじない」に変更したとは到底思えない。そもそも翻訳家は作家の意図を大きく変えることはないはずだ。ということは、キングが、もともとカントリー・ジョー＆ ザ・フィッシュの“What’s that spell ？”における“spell”の意味を「綴り」から「まじない」に変更したとことになる。その一方で、このエピグラフを読んだ読者の多くは、カントリー・ジョー＆ ザ・フィッシュの反戦ソングを思い描いたと想像できるが、その場合の読者の社会的文脈は、またしても「退廃的なムードの同時代性」なのだが、それはキングの使用した“SPELL”＝「まじない」から切り離され、「浮遊をはじめ、場違いで不作法な様相を帯びたもの」（Compagnon, 2010, p.442）、つまりウッドストックが掲げた反戦というラベルが貼られている“spell”＝「綴り」となってしまう。しかし、物語を読み進めていけば、物語の展開上、読者はキングの意味するところの“SPELL”＝「まじない」に立ち返るはずだが、その時は既に、この社会的文脈としての退廃的なムードの同時代性」は、既に著者と読者の間で合意されたダブルスタンダードとして完全に共有されている“アイコン”となっている、と私は考えている。この第三のエピグラフの効果こそ、コンパニョンが指摘する「このような小さな戯れのすべては、その根本的な機能、すなわち、刺青の機能をひたすら強化していく」（Compagnon, 2010, p.442）エピグラフの効果に他ならない。

結論

本稿は、ジェラール・ジュネットのエピグラフの機能性の説明からでは適切に読み取ることができない現代のポピュラーカルチャーにおけるジャンル小説のエピグラフ実践の効果を明らかにするため、ジュネットの説明からは“見落とされているもの”に着目し、理論面、実証面の両方から現代のジャンル小説におけるエピグラフ実践の効果を確認した。理論的な考察では、ポピュラーカルチャーの一側面である“folk culture”=「同一社会集団の中で、共通の生活・思考・行動様式をもつ人々の文化」という切り口で、ジェラール・ジュネットによるエピグラフの機能性とアントワーヌ・コンパニョンによるエピグラフの効果とを比較・考察し、ジュネットのエピグラフ機能の説明から“見落とされているもの”とは、相互作用的または社会構築主義的なエピグラフの効果であることを見出した。また、実証面での考察では、現代のジャンル小説のなかから「売れている」典型的な小説として、スティーブン・キングの『スタンド』のなかで用いられている3つのエピグラフの事例を取り上げ、著者のキングがエピグラフの提示をとおして、読者との間に社会的文脈としての「同時代性」というアイコンを共有する関係性を構築する、という相互作用的または社会構築主義的なエピグラフの効果を見出した。纏めると、ジュネットがエピグラフの機能性の分析のなかで見落としてしまっているものとは、エピグラフを読む読者の社会的文脈に寄り添い、慮り、そしてそれらを本テクストへと繋げようとする著者の精緻な姿勢であり、また、読者との間に社会的文脈=「同時代性」を共有する関係性を構築していこうとする緻密な戦略上の姿勢だ、ということを見出した。現代の大衆文化におけるジャンル小説のなかで用いられているエピグラフの特徴や機能性やその効果を理解するためには、ジュネットのエピグラフの機能性の説明からは見落とされている著者が実践する、読者の社会的文脈に配慮し、そして読者との間に「同時代性」を共有する関係性を構築しようと試みる緻密な戦略性を、エピグラフの機能性の定義のなかにはっきりと加えることが必要である。

引用文献・参考文献

風間賢二. スティーヴン・キング論集成 : アメリカの悪夢と超現実的光景. 青土社, 2021, 501, xlip.

Allen, Graham. 間テクスト性 : 文学・文化研究の新展開 . 森田孟訳 . 研究社 , 2002, 292p.

Compagnon, Antoine. 第二の手、または引用の作業 . 今井勉訳 . 水声社 , 2010, 571p.

Genette, Gérard. スイユ : テクストから書物へ . 和泉涼一訳 . 水声社 , 2001, 543p., （叢書記号学的実践 , 20）.

King, Stephen. ザ・スタンド . 深町眞理子訳 . 上 ; 下 . 文藝春秋 , 2000, 2 冊 .

Storey, John. Cultural theory and popular culture: an introduction. 5th ed. Pearson Longman, 2009, 266 p.

Wolf, Werner. “Introduction: frames, framings and framing borders in literature and other media”. Werner Wolf & Walter Bernhart, eds. Framings borders in literature and other media. Studies in intermediality 1. Rodopi, 2006. pp.1-40.